世界遺産ツーリズムにおける「体験」の意義

久保正秋*1

The Meaning of the Experience in the World Heritage Tourism

by

Masaaki KUBO

Abstract

The purpose of this study is to examine the meaning of the experience in the world heritage tourism. For that purpose I would like to consider the actual state of the tourism for the world natural heritage in Japan(Yakushima, Shirakami and Shiretoko). And this study discussed about problems of this tourism based on the theory of the tourism design. The results of this examination were as follows.

In actuality many plans of tour world natural heritage in Japan treat the heritage as the sign of tour plan. Because in the itinerary of many plans, tourists stay at the world heritage area for a short time and immediately they were transported to another famous spots by sightseeing buss. This is not the experience of the heritage but mere the passage through the heritage area. However, many tourists and long time visiting damage to the heritage. The world heritage tourism is contradictory to the protection of the heritage.

The world heritage tourism has to plan under the following guidance based on the theory of the tourism design.

1) Considering the heritage as media of thinking
2) Regarding oneself as a part of the heritage, think that experience is important.
3) Understanding the meaning of the sustainability.

This sustainability is not for economical social benefit, this has to consider for the sustainable development of the world transcended the social world. When one experiences the essential interaction with this world, the world heritage tourism grows up to the meaningful events that produce media of thinking.

＊1　東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

1.「ツーリズム（観光）」と「体験」

「観光」という言葉は，神崎によれば幕末から明治にかけて使われるようになったもので，出典は中国の「易経」の「国の光を観る。もって王に賓たるに利ろし」に求められるという。また江戸時代には「旅」「行旅」，あるいは「物見遊山」という言葉が使われていたという。神崎はこの「物見遊山」という言葉に注目し，そこには「観察的な行為（物見）」と「遊興的な行為（遊山）」の両面性があると述べている。そして「観光」は本来，観察であり「物見」の方に共通性があったものが，やがて明治の中期以降に「遊山」の方におきかえられるようになったと言う。神崎は江戸時代の「旅行用心集」にある「愛しい子には旅をさすべし」を引用し，旅には修行の意味があり，その「修行のために風物や人情をしっかりと物見すること」が重要であると述べている[1]。

このように「観光」，あるいは「物見」には，神崎が示したように，ただ風物を視覚的に眺めるだけでなく，深く観察し理解するという意味があり，それはある種の修行に例えられる行為なのである。つまり「光」を観ることによって，世界や自分自身の有り様を考え直す行為なのであり，「体験」であると言える。この「体験」の重要性について矢野は教育哲学の立場から，次にように述べている[2]。

> （「経験」に対して「体験」は：引用者）「経験」として自分のなかに取りこんでいけるようなものばかりではない。私たちは没頭して遊んでいるとき，優れた芸術作品に接したとき，あるいは自然のもつ美しさに打たれたときなどに，いつのまにか私と私を取りかこむ世界との間の境界が消えていくことがある。すぐれた体験はこのような自己と世界とを隔てる境界が溶解してしまう瞬間を生みだす。そして，この自己の境界の溶解がおきるとき，世界はこれまでにない奥行きを表わすことになる。

この「世界との間の境界が消えていく」瞬間を矢野は「溶解体験」と呼び，その生成の体験によって「自分をはるかに超えた生命と出会い，有用性の秩序を作る人間関係とはべつのところで，自己自身を価値あるものと感じることができるようになる。未来のためではなくこの現在に生きていることがどのようなことであるかを，深く感じるようになる」[3]と述べる。我々が，日常生活から離れた旅先で文化遺産や自然の壮大さに心を打たれ，「ああ」とか「おう」としか言葉に表せないとき，それはまさに「光」を観た瞬間であり，「溶解体験」であるといえる。このように考えると「ツーリズム（観光）」における「体験」は，その「物見」という面から意義を有するものと考えられる。

本研究は，このようなツーリズムにおける体験の意義を検討するために，ここでは国の「光」のであるところの世界自然遺産，それを巡るツーリズムを対象として，観光デザインという観点からその現状を検討することを試みる。

2．世界自然遺産ツーリズムの現状と問題点

1）世界自然遺産の基準

我が国において自然遺産として登録されているものは「屋久島」「白神山地」「知床」の三件である。文化遺産としては「法隆寺」「姫路城」「原爆ドーム」「紀伊山地の霊場と参詣道（熊野古道）」「石見銀山」などがあり，自然と文化の両方の価値を兼ね備えた複合遺産は我が国にはない。

自然遺産の対象は「顕著な普遍的価値を有する地形や地質，生態系，景観，絶滅のおそれのある動植物の生息・生息地などを含む地域（ユネスコ）」であり，以下の四つの登録基準のどれかに合致していなければならない（2005年まで文化遺産，自然遺産それぞれに基準が定められていたが，現在では統合された登録基準（10項目）に変更され，(vii)〜(x)の四項目で登録された物件が自然遺産となる）[4]。

(i)人類の創造的才能を表す傑作である。
(ii)ある期間，あるいは世界のある文化圏において，建築物，技術，記念碑，都市計画，景観設計の発展における人類の価値の重要な交流を示していること。

(iii)現存する，あるいはすでに消滅した文化的伝統や文明に関する独特な，あるいは稀な証拠を示していること。
(iv)人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式，あるいは建築的または技術的な集合体または景観に関する優れた見本であること。
(v)ある文化（または複数の文化）を特徴づけるような人類の伝統的集落や土地・海洋利用，あるいは人類と環境の相互作用を示す優れた例であること。特に抗しきれない歴史の流れによってその存続が危うくなっている場合。
(vi)顕著で普遍的な価値をもつ出来事，生きた伝統，思想，信仰，芸術的作品，あるいは文学的作品と直接または明白な関連があること（ただし，この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい）。
(vii)類例を見ない自然美および美的要素をもつ優れた自然現象，あるいは地域を含むこと。
(viii)生命進化の記録，地形形成において進行しつつある重要な地学的過程，あるいは重要な地質学的，自然地理学的特徴を含む，地球の歴史の主要な段階を代表とする顕著な例であること。
(ix)陸上，淡水域，沿岸および海洋の生態系，動植物群集の進化や発展において，進行しつつある重要な生態学的・生物学的過程を代表する顕著な例であること。
(x)学術上，あるいは保全上の観点から見て，顕著で普遍的な価値をもつ，絶滅のおそれがある種を含む，生物の多様性の野生状態における保全にとって，もっとも重要な自然の生育地を含むこと。

「屋久島」は平成５年12月に登録され，この基準の(vii)と(ix)に合致している。つまり，世界的に特異な樹齢数千年の屋久杉をはじめとした多くの植物，ヤクシカやヤクザルなどの絶滅のおそれのある動物，そして海岸部から亜高山に及ぶ植生の垂直分布などが評価されたものである。

「白神山地」も平成５年12月に登録され，基準の(ix)に合致している。白神山地のブナ林は氷河期以降の新しいブナ林の東アジアにおける代表的なものであり，生態学的に進行中のプロセスの顕著な見本として評価されたものである。

「知床」は平成17年７月に登録され，我が国で最も新しく自然遺産として登録されたものである。合致する基準は(ix)と(x)であり，海氷に特徴づけられる海洋生態系と陸上生態系の相互関係を示し，それが評価された。知床世界自然遺産の特徴は陸の部分だけでなく，それを取り囲む海域までも含んでいる点である。

２）世界自然遺産ツーリズムの現状

我が国の旅行会社は，この世界自然遺産を巡る様々なタイプのプランを販売している。これらのプランを大きく二つに分けると，添乗員が随行しないフリーのプラン（交通機関と宿泊所の手配のみで後は自由行動）と添乗員が随行し行程がプログラムされたプランがある。ここではツアーの行程がプログラムされた大手の旅行会社Ｊ社の２泊３日のプランを事例として取り上げ，そのプログラムの概要を報告する。ここで取り上げるプランは世界自然遺産観光プランの典型的なものといえる。

(1)屋久島ツアーの概要

Ｊ社では「世界遺産の屋久島 太古の大自然紀行」と称して２泊３日のプランを販売している。対象となったプランの出発日は10月11日から３月27日で，主な行程は以下の通りである。

〈１日目〉：羽田空港-鹿児島空港-（バス）-仙巌園・尚古集成館（昼食：紅葉・菊見学）-（バス）-鹿児島本港-（高速船）-宮之浦港（屋久島）-（バス）-志戸子ガジュマル園（20分）-（バス）-永田いなか浜（15分）-（バス）-屋久島観光センター（30分）-（バス）-宮之浦（泊）
〈２日目〉：終日自由行動
〈３日目〉：宮之浦-（バス）-千尋の滝（20分）-（バス）-紀元杉（20分）-（バス）-屋久杉ランド（40分）-（バス）-安房港-（高速船）-鹿児島本港-（バス）-城山公園（20分）-（バス）-パレルパレープラハ&GEN（30分）-（バス）-鹿児島空港-羽田空港

1日目の「仙巌園」は鹿児島市内にある薩摩藩主島津氏の別邸跡と庭園，「尚古集成館」は仙巌園に隣接する博物館。「鹿児島本港」から「宮之浦港」までは高速船トッピーで1時間45分（直行便の場合）。「宮之浦港」は屋久島の北部に位置する港。「志戸子ガジュマル園」は宮之浦港からバスで10分の所にあるガジュマルの密生地。「永田いなか浜」はさらにバスで20分の所に位置するウミガメの産卵の砂浜でNPO法人が運営する「うみがめ館」がある。そこから反転して宮之浦に戻る。「屋久島観光センター」は宮之浦港に隣接する観光案内所であり，おみやげ市場でもある。1日目，2日目ともに宿泊地は宮之浦。

3日目の「千尋の滝」は屋久島の南部に位置する落差約60mの大滝。宮之浦から「安房（あんぼう）」を経てバスで約50分。そこから反転し「安房」に戻り，約30分山道を登り，「紀元杉」に到着。「紀元杉」とは樹齢3000年，周囲8.1m，高さ19.5mの巨木であり，車道のすぐそばにあって車で行ける最大の屋久杉といわれている。さらにバスで15分，「屋久杉ランド」に至る。「屋久杉ランド」は世界自然遺産地域には入っていないが，樹齢2500年以上の巨木が見られる自然休養林である。ランド内は路が整備されており，30分，50分，80分，150分のコースが設定されている。このプランでは30分コースを散策することになり，樹齢2000年以上の巨木を目にすることはない。屋久杉といえば，周囲16.1m，高さ30m，樹齢3000年以上といわれる「縄文杉」が有名であるが，そこに至るには往復8-10時間程度の行程が必要である。「屋久杉ランド」から屋久島の東部に位置する「安房港」へと戻り，高速船で鹿児島本港へ。「城山公園」は桜島が一望できる展望台，周辺は西南の役の古戦場でもある。「パレルパレープラハ&GEN」とは鹿児島空港近くの焼酎工場である。

⑵白神山地ツアーの概要

J社では「専門ガイドと歩く白神山地と奥入瀬渓流東北大自然紀行」と称して2泊3日のプランを発売している。対象となったプランの出発日は9月18日から11月15日で，主な行程は以下の通りである。

〈1日目〉：羽田空港-青森空港（または大館能代空港）-（バス）-西目屋村-暗門の滝入口-（登山道往復180分）-暗門の滝-（バス）-大鰐温泉（泊）
〈2日目〉：大鰐温泉-（バス）-八甲田ロープウェイ-（バス）-奥入瀬渓流-（散策120分）-（バス）-十和田湖-十和田湖畔温泉（泊）
〈3日目〉：十和田湖畔温泉-（バス）-八幡平-（バス）-玉川温泉-（バス）-角館-（バス）-秋田空港-羽田空港

1日目は空港から白神山地弘前市側の西目屋へバスで向かう。暗門の滝入口の駐車場でバスを降り，暗門の滝登山道を進む。約35分で暗門第三の滝，それから15分で第二の滝に至る。その先に第三の滝があるが，プランでは第二の滝まで案内となっている。「暗門の滝」は世界自然遺産の緩衝地域に入っており，このプランでは専門ガイドが同行する。散策後，バスで宿泊地大鰐温泉へと向かう（南津軽温泉郷の場合もある）。

2日目は宿泊地から十和田湖へと向かう。途中，八甲田ロープウェイで八甲田山頂まで往復し（別料金），奥入瀬へと到着。ここで遊歩道を専門ガイドと共約に2時間散策する。その後，十和田湖畔温泉で宿泊。

3日目は，十和田湖から八幡平を経由し角館へ。途中，玉川温泉へ立ち寄り希望者は入浴。武家屋敷で有名な角館を後にし，秋田空港へと至る。

⑶知床ツアー

「世界遺産知床に泊まる道東周遊の決定版」と称するJ社のプランは羽田空港を朝出発し，層雲峡温泉，知床ウトロ温泉にそれぞれ1泊，道内をバスで移動する2泊3日の旅である。このプランも世界自然遺産である知床を強調している。対象となったプランの出発日は4月1日から7月16日で，主な行程は以下の通りである。

〈1日目〉：羽田空港-新千歳空港-旭山動物園（150分）-四季彩の丘（30分）-層雲峡温泉（泊）

〈2日目〉：層雲峡温泉-銀河・流星の滝（15分）-北きつね牧場（30分）-藻琴（昼食：かにづくし）-オホーツク花めぐり（網走湖，小清水原生花園など）-知床峠（20分）-知床五湖（60分）-知床・ウトロ温泉（泊）
〈3日目〉：知床・ウトロ温泉-フレペの滝・あるいは知床観光船の選択-オシンコシンの滝（15分）-ハイランド小清水（20分）-川湯（昼食：海鮮炭火焼き）-摩周湖（30分）-阿寒湖（30分）-とかち帯広空港（または釧路空港，女満別空港）-羽田空港

1日目，新千歳空港から旭川まで高速道路経由，バスで約2時間。「旭山動物園」は旭川市の東方に位置する話題の動物園。「四季彩の丘」は旭川から国道237号線を南下した美瑛町にある展望花畑である。初日の宿泊地である「層雲峡温泉」へは一旦，旭川に戻り，そこから国道39号線を約60㎞東方へと進む。層雲峡は大雪山国立公園に位置する渓谷である。

2日目の「銀河・流星の滝」は層雲峡温泉から約3㎞の所にある日本の滝百選に選定された層雲峡の見所のひとつである。「北きつね牧場」は層雲峡から網走へと向かう国道39号線を約1時間15分走ったところにある。さらに約2時間，網走を経て「藻琴」へ。藻琴駅は釧網線（JR北海道）の木造無人駅であり，駅舎内で営業している喫茶「トロッコ」がガイドブックなどに紹介されている。「オホーツク花めぐり」は時期によって場所が変わるが，そのひとつである「小清水原生花園」は網走から知床へと向かう国道244号線に沿ったオホーツク海と涛沸湖に挟まれた砂丘にある。また，5月から10月までのJR釧網本線の臨時停車駅JR原生花園駅はログハウスの造りであり，観光名所となっている。このプランでは網走市観光協会公認の現地ガイドが案内をする。行程はそこから知床へと向かい，宿泊地であるウトロを通過し，羅臼町へと続く国道334号線を進み「知床峠」に到着する。「知床峠」は知床連山の尾根筋にあたる標高738ｍの峠で，羅臼岳を臨む。ここには駐車場があるのみで観光客のための施設はない。「知床峠」からウトロ方面へと戻り，知床公園線に入り「知床五湖」に到着。「知床五湖」は原生林に囲まれた湖で，五湖全てを巡るには約1時間を要する。このプランでは一湖，二湖を巡るのみである。そしてバスで約20分，宿泊地である「ウトロ温泉」に到着する。

3日目は「フレペの滝」あるいは「知床観光船」の選択が可能である。「フレペの滝」へは知床峠方面へバスで約10分の「知床自然センター」から遊歩道を約20分，海へと落ちる滝を上から眺めることになる。途中，エゾシカに出会うことがあるが，滞在時間60分では往復でほとんどの時間を費やしてしまう。「知床観光船」はウトロから出航するが，知床岬航路（大型船：所要時間3時間45分）と硫黄山航路（大型船：所要時間1時間30分）のふたつがある。知床岬航路では知床岬が折り返し点となり，ヒグマやクジラと出会うこともある。硫黄山航路は「フレペの滝」を海側から眺め，知床五湖の先に位置する「カムイワッカの滝」付近で折り返えす。プランではこの硫黄山航路となる。この選択された行程の後，網走方面へと334号線をバスで移動する。途中，路沿いにある「オシンコシンの滝」を見学し，屈斜路湖を一望するビューポイント「ハイランド小清水」を経て「川湯」に到着し昼食。その後，「摩周湖」「阿寒湖」を周遊し空港へと向かう。

3）世界自然遺産ツーリズムの問題点

⑴「看板」としての世界自然遺産

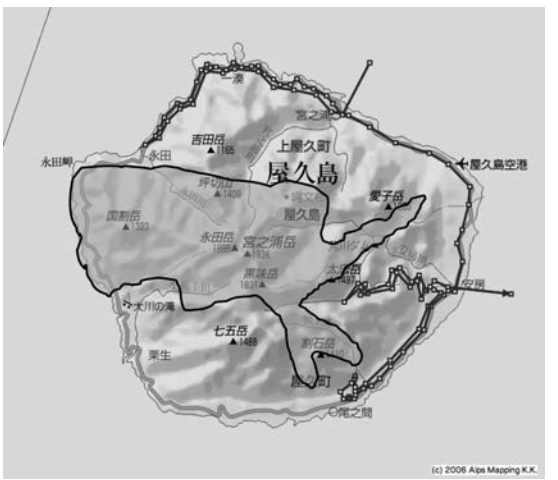
図はこの3つのツアープランの道程を表したものである。線で囲まれた部分が世界自然遺産としての核心地域，および緩衝地域である。図から明らかなように，これらのツアープランでは世界自然遺産として指定された地域への道程は限られたものになっている。

例えば屋久島ツアーにおいては世界自然遺産の登録地域に足を踏み入れることはない。「屋久杉ランド」が最も登録地域に近く，屋久杉を見ることもできるが，滞在時間は40分であり，ランド全体のごく一部を散策するのみである。2日目の自由行動の時間を用いて登山を試みることも可能だが危険である。案内ガイド付きの登山のオプションはこのプランにはない。

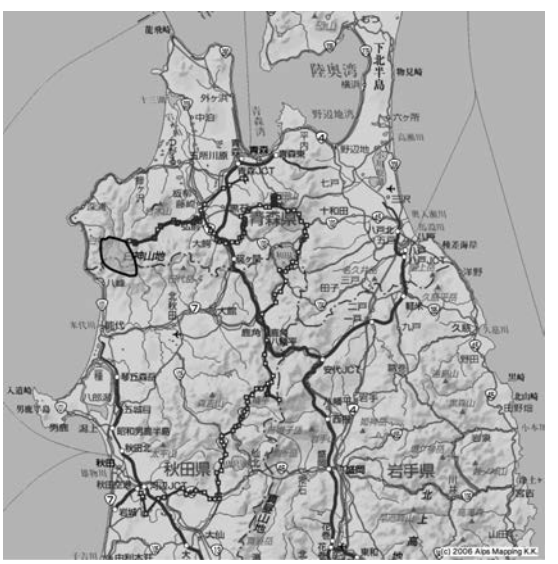
白神山地ツアーにおいては，自然遺産の緩衝地域である「暗門の滝」への散策がプログラムされているが，これも初日のみである。Ｊ社の別のプランや他社のプランにおいて「十二湖」や「ミニ白神」を訪れるプログラムがあるが，そこは自然遺産そのものではない。「十二湖」は世界遺産緩衝地域の大峰岳まで直線で約3.5km，核心地域の白神岳まで７km離れており，「ミニ白神」は，白神山地の特徴であるブナを主とする天然広葉樹林を形成し，樹齢約200年を超えるブナも多く見受けられるというが，世界遺産地域の約20km北に位置している。

さらに知床ツアーでは，世界自然遺産に触れるのは，羅臼岳が一望できる「知床峠」，「知床五湖」，知床自然センターから散策する「フレペの滝」，そして「知床観光船」の進む海域である。世界自然遺産に触れるのは２泊３日の行程の２日目の夕方と最終日の朝のみということになる。またこのプランでは，自然遺産地域の半分を占める羅臼の町は行程に入っていない。

このように，「世界自然遺産を巡る」というツアーでありながら，実際には屋久島ツアーでは鹿児島市内，白神山地ツアーでは奥入瀬，十和田湖，八甲田，角館，あるいは別のツアープランでは津軽・下北半島，平泉中尊寺など，知床ツアーでは層雲峡，旭山動物園，阿寒湖，摩周湖などの周辺の観光スポットを巡る行程となっている。よって観光客たちは，多くの時間を移動のバスの車窓から風景を眺めることとなる。そして下車したスポットにおいても足早に見て回り，またバスに乗車する。このように世界自然遺産は，ツアー行程の単なるひとつのスポットにすぎず，ツアーの「看板」に成り下がっているのである。「知床五湖」でバスガイドが「一湖，二湖までのコースで引き返してください。三湖方面へは絶対に行かないでください，時間内に帰れなくなります」と説明していたのが印象的である。



世界自然遺産地域と屋久島ツアー道程



世界自然遺産地域と白神山地ツアー道程



世界自然遺産地域と知床ツアー道程

⑵環境保全の問題

確かに，世界遺産の核心地域へ入場は困難である。例えば，白神山地の核心地域への入山には27の指定ルートと既存の歩道があるが，入山手続きを森林管理所などに事前に提出する必要がある。

また，秋田県側の核心地域には入山することができない。知床においても「知床五湖」から「カムイワッカ」方面への道は閉鎖され，専用のシャトルバスを利用することになる。本来，世界遺産は人類共通の「たから」であるところの遺産を保護することを目的としたものであり，「世界遺産条約」は正式には「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」(Convention Concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage) という。よって，世界遺産に人々が訪れること自体がその目的に反することとなる。特に自然遺産の場合は，その遺産そのものやその生態系を破壊する危険性がある。屋久島の「縄文杉」は多くの人々が訪れるようになり，根が傷み，現在ではそれを保護するために柵を設けている。白神山地の田代湿原では，登山者の衣服に付着して持ち込まれる植物の新参種がはびこっていることを現地ガイドは指摘している。知床では，心ない観光客が投げ与えたソーセージの味が忘れられず，それを求めて何度も里に下りてくるようになって射殺された「ソーセージ」と呼ばれたヒグマの悲劇が伝えられている。このように世界自然遺産に登録され「光」が増したことことで多くの観光客が訪れるのだが，それによって「光」が減退するという矛盾が生じる可能性があるのである。

3．観光デザインという観点からの検討

ここでは先に取り上げた世界自然遺産ツーリズムの問題点を「観光デザイン」という観点から検討することを試みる。「観光デザイン」とは，桑田によれば「『観光』の分野に芸術的手法や美的感覚を取り入れて，『観光』をめぐる諸問題の美的・質的解決を図ることである」という。現在では，自然環境，都市環境，文化遺産にまでその対象が広がり，既存のデザインや芸術学の役割では対応困難になっており，「アート，テクノロジー，エコロジーなどを俯瞰する視点と，自然環境，社会環境，文化環境などの的確な分析のもと，観光活動に関わる世界をデザインすること」が求められているという[5]。

今回の研究では，その中でも「エコツーリズム」と「ヘリテージツーリズム」における観光デザインを取り上げ，問題解決の方向性とツーリズムにおける「体験」の在り方を探っていく。

1）「エコツーリズム」と「ヘリテージツーリズム」

「エコツーリズム」とは「地域固有の自然・文化・歴史資源を活用し，地域主体の観光産業を成立させること」「それらの資源が持続的に利用できるよう，資源を保全していくこと」「観光の波及により，地域経済の活性化に資すること」という三つの相補的な認識上に成り立った，観光産業と自然，文化，歴史資源の保護の融合のための社会運営システムであるという[6]。さらにこの「エコツーリズム」の特色は，従来の「客のニーズに応える」という観点ではなく，地域の「光」を経済的手段としつつも持続的な保全を図るという観点に立つことであるという。そして資源を「見世物」にするのではなく，「地域の人々の長い歴史を通じた資源との関わりあいを追体験すること」が重要であるという[7]。

「ヘリテージツーリズム」とは，山村の定義に基づけば，「遺産を享受する行為と，遺産の価値を再確認し他の人々に伝える行為とを通じて交流を促進し，遺産の構成要素の一部として自らを位置づけること」と纏めることが出来る[8]。そして彼は，①「遺産」の全体性の把握，②過去・現在・未来という時間軸での思考，③思想のメディアとしての「遺産」の解読，がヘリテージツーリズムのポイントであるとしている[9]。

この「エコツーリズム」「ヘリテージツーリズム」のデザインという観点から以下にあげるポイントを取り上げ，本研究における「世界自然遺産ツーリズム」検討の指標とする。

①過去から未来へという時間軸で思考し，遺産を思想のメディアとして捉える。

②遺産の要素の一部として自らを位置づけ，その関わり合いを体験することを重視する。

③ニーズに応えるのではなく，持続可能な保全を計るという観点に立つ。

2）「世界自然遺産ツーリズム」の問題解決の方向性

これらのポイントから，先に指摘した世界自然

遺産ツーリズムの問題点を検討することによって，次のような問題解決の方向性が導き出される。世界自然遺産がツアー行程の単なるひとつのスポットにすぎず，ツアーの「看板」に成り下がっているという問題は，「遺産との関わり合いの体験」「思想のメディアとしての遺産」という指標から再考されるべきであろう。

国土交通省編集の「平成19年度版観光白書」では「平成18年度の観光の状況及び施策」において，第５章「観光旅行促進のための環境の整備」，第６節「観光地における環境及び良好な景観の保全」のなかで世界遺産を取り上げている。「観光旅行者による自然体験活動を通じた環境の保全に関する知識の普及及び理解の増進」という表題で，「案内板や説明版の設置等観光客に世界遺産としての価値を分かりやすく伝えるための整備」を行い，自然遺産では「管理計画に基づき，入山者の増加に対応した保全対策を実施するなど，保護・管理を行うとともに，世界遺産センター（屋久島，白神山地）等において，遺産地域の管理，調査研究及び普及啓発等を実施した」と報告されている[10]。ここに示されているように，世界自然遺産ツーリズムでは「自然体験活動を通じた環境の保全に関する知識の普及及び理解の増進」が求められているのである。しかしながら「看板としての世界自然遺産」を巡るツアーでは自然の体験や理解よりも，できるだけ数多くの有名なスポットに訪れることが優先されている。よって，ツアーでは土産物が販売されている「観光センター」には立ち寄るが，白書に記載されている屋久島や白神山地の世界遺産センターを訪れることはないのである。

我々は遺産を外部から眺めるのではなく，人間はその自然遺産の要素の一部であるという位置づけが必要である。自然遺産を訪れるとは，そのなかに存在するということであり，自分自身の存在が自然遺産とどのように関わっているのかを認識する必要がある。例えば，屋久島世界遺産センターに隣接する「屋久島環境文化研修センター」では，水に溶けるティッシュペーパーを配付している。何故に「水に溶ける」ことが必要なのか理解し，そして認識しなければならない。そのことが，何千年という時間を経て屋久杉と自分自身が今，その時間を共有し，またその時間は未来へと向けて流れていく，という大きな思想を培うこととなる。

我々には世界自然遺産を単に「見る」のではなく，そのなかで「観る」ことが求められている。「観光」「物見」の本来の意味，すなわち「ただ風物を視覚的に眺めるだけでなく，深く観察し理解する」ことが求められるのである。世界自然遺産ツーリズムは，「光」を観ることによって，世界や自分自身の有り様を考え直す行為である。有名な多くのポイントを訪れ，それを見るところに意義があるのではなく，自然と自らの関係を知り，理解する「体験」として「自己自身を価値あるものと感じることができるようになる（前出：矢野)」ところに重要な意義があるといってよいだろう。

環境保全の問題に関しては「持続可能な保全という観点」が重要視されなければならない。この「持続可能」あるいは「持続可能性」という言葉は「sustainability」あるいは「sustainable development」の訳語であり，1987年の国連環境開発委員会（ブルントラント委員会）において提唱されたものである。「将来の世代が享受する経済的，社会的な利益を損なわない形で現在の世代が環境を利用していこうとする考え方。例えば，漁業資源を長持ちさせるよう乱獲をさけるのが一例。目先の利益を重視して開発を進めると，環境が悪化し，結局，経済的利益も得られなくなる。こうした従来の開発に対する反省にたって提唱された」と説明されている[11]。この「持続可能な保全という観点」も，先に示した「過去から未来へという時間軸で思考し，遺産を思想のメディアとして捉える」という指標にもとづいて再考されるべきであろう。先に述べたように「人間はその自然遺産の要素の一部」であり，自然遺産は人間に対峙するものでもなく，また人間による操作の対象でもない。この「持続」は人間の「経済的，社会的な利益」のためにではなく，それを超えた，人間をも含んだ世界のために提唱されるべきであろう。保全が必要となる環境悪化をもたらしたのは人間なのであり，その人間の利益のために「持

続」させるのではない。

世界自然遺産に向き合い，本来の意味で「遺産との関わり合い」を体験したものは，このような思想を培うことが可能となるであろう。その時，「世界自然遺産ツーリズム」は思想のメディアを生み出す意義ある出来事となり得るといえよう。

注および引用・参考文献

1）神崎宣武編著（2005）文明としてのツーリズム．人文書館，pp. 11-13．

2）矢野智司（2002）関係の変容と関係概念の貧困化　―教育における関係性の危機とは何か―．教育学研究第69巻１号，pp. 49-51．

3）矢野智司（2002）前掲書，p. 50．

4）社団法人日本ユネスコ協会連盟：世界遺産の登録基準
http://www.unesco.or.jp/contents/isan/decides.html

5）桑田政美編（2006）観光デザイン学の創造．世界思想社，p. 169．

6）真板昭夫（2006）エコツーリズムデザインの実践的展開とその特色．桑田政美編「観光デザイン学の創造」所収．世界思想社，pp. 143-144．

7）真板昭夫（2006）前掲書，pp. 148-149．

8）山村高淑（2006）ヘリテージツーリズムをデザインすることの意義とその思想．桑田政美編「観光デザイン学の創造」所収．世界思想社，pp. 113-116．

9）山村は「ヘリテージ」を「文化遺産」としてのみ扱っており，「自然遺産」に関する言及はない．しかしながら彼の見解は「自然遺産」に関してもあてはまるものであり，本研究では彼の謂う「文化遺産」を「自然遺産」に読み替えて記述している．

10）国土交通省編（2007）観光白書平成19年度版．コミュニカ，pp. 149-150．

11）現代用語の基礎知識2005年版．自由国民社．